書籍紹介

新村　拓 著
『日 本 医 療 史』

本学会理事の新村拓氏が分量的にはコンパクトでありながら内容的にはきわめて浩瀚な広がりをもつ日本の医学史および医療史の歴史に残る名著を著された．すでに刊行から2年を経ているが，その価値はいささも減ずることなく，むしろ年ごとにその行き届いた内容に敬服させられる．

本書は，吉川弘文館が課題別の日本通史の1巻として企画し，編集が新村氏に依頼されたものと思われる．『日本仏教史（古代・中世・近世・近代の4巻）』『日本軍事史』『日本災害史』など，ユニークな視点から領域を定め，当代一流の歴史学者によって概説するこのシリーズは，コンサイスでしかも充実した内容の歴史専門書のシリーズとして定評がある．

今回，医療に関する通史がこのシリーズの企画となり，それが新村氏の手によって編集されたことは実に適確な選択であったといえる．なぜならば法政大学出版局から刊行されている一連の保健と医学，医療に関する歴史的概説書によってその論述が常に高く評価されている新村氏ならではの企画となっているからである．

ここで，本書の全体の内容を摘記しておこう．プロローグのあたる序論的記述は「死と病と医」と題されている．ここに編者である新村氏の本書に託した一つの基本的なテーゼが込められている．これについては後述したい．

一「古代の医療」は「古代国家の医療体制」「平安の都人を襲った病」の2節からなり，新村氏の執筆である．二「中世の医療」は「典薬寮の変質と空洞化」「民間医の登場」の2節からなり，同じく新村氏によって執筆されている．この2章は新村氏の専門領域であり，他の追随を許さない。おそらく紙幅の制限をもどかしく思われながら縦横の記述と考察を籠められたことが推察される優れたまとまりようと深さを兼ね備えている．

三「戦国期の医療」は，「道三流（当流）医学の普及」「戦国大名と豊臣政権の医療政策」「金創療法と常備薬」の3節からなり，宮本義巳氏によって著されている．四「近世の医療」は「徳川幕藩制社会の医制と医療」「医師と病と医療」「家庭の疾病対策」の3節からなり，同じく宮本氏が執筆されている．宮本氏の担当されたこの両章は，中国医学を範としていた日本の医学がその影響を濃厚に受けながらも次第に独自の展開を遂げていく過程をその要因ごとに集約して構成し，詳細な史実の紹介をもってそれを論証している．また，他の章においても同様の特徴がみられるが，医療社会史的な内容，例えば，養生や家庭薬，湯治などの保健医療文化に関しても，詳細とはいかないまでもかなりの筆を割いている．

五「近世の西洋医学と医療」はこの方面にきわめて造詣の深い青木歳幸氏が担当しており，「ヨーロッパ医学との出会い」「紅毛流医学の伝来」「蘭学の勃興」「全国に広がる蘭学塾と医療」「在村蘭学の展開」「種痘（牛痘種法）の普及」「幕末の西洋医学」「維新と西洋医学への傾斜」の8節よりなる．この章はまさに青木氏の独擅場といえ，該博な学殖が展開されており，それでいて裾野の広い日本医学の西洋医学との邂逅とその内在化の過程が明瞭に構造化されて示されている．

六「西洋医学体制の確立」（「医制」の公布と医学の「近代化」，「伝染病と衛生行政」「医療制度の整備」「人々の暮らしと病の諸相」の4節構成），七「産業社会と医療（「産業化と救貧医療」「医師会の成立と社会化の動き」「結核の蔓延と乳児死亡率の上昇」の3節構成），八「戦時体制下の医療」（「厚生省の創設と厚生行政」「医療の国家管理」「戦時体制下の健康問題」の3節構成），九「戦後の医療」（「占領期の医療改革」「高度経済成長期の医療」の2節構成）の4章は杉山章子氏が一手

に引き受けて執筆されている．他の執筆者も同様であろうと思うが，これだけの章を一人で担当され，かつ所定の分量に記述を集約していくことには多くの努力と泣く泣く省いた内容があったものと推察する．また巻末に大変便利な年表が30ページにわたって掲載されているが，これは三崎裕子氏の手になるものである．

本書の全体を通じて言えることは，「医療史」というタイトルからみればむしろ当然であるのだろうが，「人」と「病」と「医学」と「医療」，そして「社会」の5つの要素の相互関係が常に念頭におかれて記述されていることである．この構造だけをとっても，本書が他の類書と比してもその独自性と学界全体にあたえる意義は大きい．もちろん，個々の史実についての書き込み方についての精粗はあるだろうし，各分野の専門の研究者からみればさらに補足を要するという点もなしとはしないだろう．しかしながら，全体で350ページ程度の本にこれだけの内容と解釈を盛り込んだ本を刊行した壮挙の意義はいささかも揺るがないだろう．

本書を評することを結ぶにあたり，新村氏のプロローグで述べられていることを再び思い起こしてみたい．新村氏がそこで考えていることはまず「よき死」「よき生」とは何かである．「頓死往生」，つまり苦しまずに自然に死を迎えること，これを保証するために医療は何ができるのか，そして医学はそれをどのように導くか，そして社会はそれをどのように支えていけばよいか，これを考えていくことが医学や医療の使命であるという透徹した思想が編者の新村氏にあるようにみえるのは評者だけの憶見なのであろうか．ともあれ，このような労作をものされた編者の新村氏と著者の方々の意欲と見識に心から感謝したい．

（瀧澤　利行）

〔吉川弘文館，〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目2番8号，2006年8月，四六判，388頁，3,500円＋税〕

片桐一男 著
『それでも江戸は鎖国だったのか――オランダ宿 日本橋長崎屋――』

紅毛（オランダ）も花に来にけり馬に鞍
長崎屋自分のうちに分けて入り

この川柳は，毎年3月に入るとオランダ甲比丹の一行が，着かざって行列をととのえ江戸へあがって来る．その時の江戸日本橋附近の風景を詠んだものである．紅毛さんの顔はどんな色つやか，鞍にくくりつけた荷の中身は何だろう．どんな献上物であろうかと，物見高い町人が本石町の長崎屋の前をうづめつくしている．紅毛宿・長崎屋の主人が群衆を押し分けて紅毛人を案内しなくてはならぬほどの騒ぎである．寛永10年（1633）以降の風景で，後に葛飾北斎は「長崎屋図」として絵描いて一作としている．

だが，江戸の異文化交流サロンの出発点としての長崎屋については，案外知られていないのである．長崎屋自体がその後類焼に次ぐ類焼にあって，いっさいの記録を失っているからである．

本書の筆者片桐一男名誉教授（青山学院大学）は，蘭学史研究に研鑽され，ここ約10年の間に10冊ほどの著書を上梓されている．なかでも『阿蘭陀宿海老屋の研究』，『レフィスゾーン江戸参府日記・翻訳』，『阿蘭陀宿長崎屋の史料研究』等の一連の仕事には，眼をみはるものがある．これらの大作の中から論点を抽出し，検討と考察を骨組みに補充の手を加えて，新たに蘭学研究者に役立つ長崎屋論をまとめ上げたのが本書である．私流の目次案内でまづ紹介しよう．

◎江戸の異文化交流――プロローグ
（知られざる江戸の長崎屋，異文化交流サロン，見えてくるその実態）
◎江戸のオランダ宿・長崎屋
・江戸の長崎屋とはなにか